古佐の大刀、五十兵衛〈いそべえ〉（丹南町）

今から六百年ほども前のことです。
古市の二村神社のお祭りに、村々で大へんな争いが起りました。
どうしても話し合いができないで、村々ではとうとうご神像〈しんぞう〉と神具、みこしなどを思い思いに持って帰りました。
その頃、味間〈あじま〉の西古佐に、小柴〈こしば〉というとても力の強い人が住んでいました。この話を聞いて、さっそく、みこしを一人でかついで持ち帰ろうとしましたが、大そう重いので道々休みながら帰っていきました。それを見た味間の人達が、
「おい、小柴さん一人じゃないか、わしらも手伝おう。」
と、みんなで後からかついで帰りました。

けんか別れをしてからは、お祭りを別々にするようになり、味間にも二村神社が出来ました。そしてお祭のみこしの先棒は西古佐の人がかつぎ、後棒は味間の人達がかつぐようになりました。
ところが、江戸時代の終りごろ、西古佐に五十兵衛という力の強い人がいて、みこしかつぎに出ると、負けたことがなくびくともしません。五十兵衛さんは人に負けるのが大へんきらいな人ですから、もっともっと力の強い人になりたいと思って、神様に、
「どうかわたしを、千人力にしてください。」
と、毎晩毎晩お願いしましたが、二十一日目の真夜中に、神様が、
「五十兵衛や、あんまり熱心にお願いするから、千人力にしてやろう。」
と、声がしました。五十兵衛さんは、びっくりしてうれし泣きに涙を流してよろこびましたが、さあ帰ろうとすると、足が土の中にめり込んで動けなくなったのです。千人力の力持ちになられたのです。
さあ大へんです。さすがの五十兵衛さんも困ってしまいました。
「神様お願いです。足が土にめり込んで動けません。どうか、もと通りの人間で、十人力位にしてください、たのみます。」
と何べんも何べんもお願いしました。
十人力になった五十兵衛さんは、たいへん喜んで帰っていきましたが、それからのお祭りには、五十兵衛さんのいる限り、みこしかきは負けたことがなかったということです。